

根津美術館所蔵 伝李安忠筆国宝《鶉図》の想定復元模写研究

中田 日菜子（金沢美術工芸大学大学院）

1. はじめに

根津美術館所蔵の伝李安忠筆《鶉図》（国宝、以下、根津本《鶉図》と称す。[図1]）の現状模写に関わる原本調査を令和3（2021）年11月に実施した際、本作品の芸術性を問い直すべき図と色彩の新知見を得た。本研究では、この成果をもとに本作品の想定復元模写制作を行い、現状模写との比較や、先行研究及びこれまでの作品解説にある本作品の捉えられ方との考証を行い、経年変化が芸術性の認識に与える影響を考察する。

2. 国宝 伝李安忠筆《鶉図》について

本作は中国・南宋時代（12～13世紀）に、画院画家である李安忠（生没年不詳）によって描かれたと考えられる絹本着彩画である。画面は、縦24.4cm×横27.8cmの団扇形で画面右上に足利義教の鑑蔵印「雑華室印」が捺されている。描かれるモチーフは、右足をあげた鶉、その手前に穂の実る雄日芝、背後の赤い実をつけた枸杞である。鶉の羽根の一本一本や、雄日芝や枸杞の葉脈、穂の様子などが詳細に描きこまれる一方、土坡や画面右側に描かれている葉は単純化され、輪郭線に淡い彩色で表現されている。

web上では非公開としています

[図1] 根津美術館所蔵 伝李安忠筆国宝《鶉図》、絹本着色、24.2×27.2cm、南宋時代

3. 原本調査

根津本《鶉図》の原本調査は、令和3（2021）年11月18日に根津美術館の協力を得て行った。運筆や施色、絵絹の状態を目視及びルーペで観察し、デジタルカメラによる記録撮影、赤外線撮影による調査を行った。この調査において、鶉の左後方に位置する枸杞の花に加えて蕾の存在を新たに確認した。図版では枸杞の赤い実に彩色されていた絵具層が剥落したものと推測していたが、原本調査では実を表現する絵具層の剥落跡ではなく、紫色の絵具を彩色した花卉や蕾が描かれていたことを確認した。現在の根津本《鶉図》は、一見すると枸杞の花や蕾は背景色に溶け込んでしまっているため作品にその印象がない。制作当初、紫色の絵具を彩色した枸杞の花や蕾が表現されていたものの、経年変化によりいつの間にか鑑賞者に理解されにくくなったとの推測した。枸杞は、ナス科の落葉低木で紫色の花を付ける。これは、本図の重要な色彩の一つであり作品の印象を左右するものと言えるのではないだろうか〔図2〕。



〔図2〕 根津本《鶉図》の部分。枸杞の花や蕾が描かれているが認識しづらくなっている。

4. 模写制作

（1）上げ写し（白描模写）

絵絹の縮みを想定し原寸大より縦の縮尺を5%引き伸ばした原本のカラー画像を印刷し原本とした。上げ写しには、薄く摩擦やひっぱりに耐えられる頑丈な和紙として1.8匁の薄美濃紙を用い、線描を墨線で写しとったものを下図とした〔図3〕。

（2）絵絹と地色

根津本《鶉図》は南宋時代の絵絹の特徴を持つが、どちらかと言うと北宋時代に近いも

のだと考える¹。模写制作では、手織り風機械織り絵絹を用いた上で寒天引きを施すことで絹目を平滑にした。現状模写制作では、古色を表現するために絵絹を矢車と胡桃の染料で染めた上で背景色における微妙な色彩の変化を写しとった。想定復元模写の地（背景）には彩色を施さず現状模写と比較することにした。それは、先行研究の宋代の想定復元模写では、生絹の色をそのまま生かしたものが多く、これらを参考にした結果でもある。また、本図の熟覧の際、背景色のムラや微妙な色彩の変化を確認していたが、それを作者の意図的なものと判断するには確証が持てなかったことも理由の一つである。

(3) 彩色

南宋時代の院体花鳥画には裏彩色の技法が多用されており、根津本《鶉図》にも裏彩色が施されていたと考えた。根津本《鶉図》はその他の南宋花鳥画と比較すると極めて薄塗りである²。墨や、藍、藤黄などの染料系絵具を用い、顔料は薄く部分的に塗布した。また、制作途中では塗布した顔料を洗い落とすことで厚塗りを避けた。用いた絵具については、中国画顔料の先行研究³や、その他の南宋花鳥画の修復記録などの先行研究⁴、熟覧の際に抱いた印象をもとに想定した⁵〔図4〕。枸杞の花弁部分は、現状で薄らと輪郭線が残っており、墨線で輪郭を描いたのち、花卉部分には退色しやすい染料系の絵具を塗布していたと考えられる。現実に咲く枸杞の色味を参考にし、臙脂と鉛白を用いて花卉の紫色を再現した〔図5〕。



〔図3〕白描模写（薄美濃紙に墨）



〔図4〕想定復元模写制作途中・裏面



〔図5〕想定復元模写部分

(4) 裏打ち・表装

現状模写には矢車と墨の混色で濃く染めた肌裏打紙、想定復元模写には矢車で薄く染めた肌裏紙を打った。二幅は同じ表装を施した。

¹ 絵絹は、作られた時代や、環境、生産地によってその構造が変化する。一般的には、北宋代から南宋半ばにかけてが最も絵絹の質がよく、南宋後半には低下すること、同じく経緯の密度は北宋から南宋後半に移行するに従い、おおそ密から疎になっていくと言われている。泉武夫『古代中世絵絹集成 基底材の美術史』中央公論美術出版、2022年

² 《鶉図》に関連するその他の南宋花鳥画の熟覧調査を通し模写の精度を高めた。2021年7月2日に、金沢市中村記念美術館蔵 伝李安忠筆「鶉図」、2022年11月11日に、大和文華館蔵 伝毛益筆《萱草遊狗図》・《蜀葵遊猫図》の熟覧調査を行った。

³ 于非闇・服部匡延「中国画顔料の研究〔6完〕」金沢美術工芸大学、1987年

⁴ 岡岩太郎「重要文化財《萱草遊狗図》・《蜀葵遊猫図》修理報告」『大和文華第134号』大和文華館、2019年、10頁

⁵ 裏彩色に用いた絵具として、枸杞の実には、黄土、枸杞の葉には緑青、鶉の目には金泥、脚には朱と鉛白の混合色、鶉の体躯全体には黄土を塗布した。

5. 総括

根津本《鶉図》からは小さな画面でありながらも広大な空間の奥行きを感じられる。日本や中国の古画の地（背景）の多くは、現状において淡い茶系から茶褐色を呈しており、古色づいている。これらの経年変化によって生じる要素も古画の魅力の一つである。特に鶉の白い羽毛部分を映えてみせるなど、作品の印象を大きく左右する要素である。想定復元模写〔図6〕を現状模写〔図7〕と比較すると、鶉を取り巻く空気感が感じられなかった。現状の目視調査において明らかな色味が看取できなかった根津本《鶉図》であるが、地色に何も彩色しない状態での違和感や、その他の南宋花鳥画での意図的な彩色からも、根津本《鶉図》の地色も何からの彩色を行っていたのではないかと推測する〔図8〕。余白と思われていた背景には、微かに作者の意図的な彩色が施されており、作者が地面と地とを意識することで、初めて自然な空間が生まれると言えるのではないだろうか。今回の想定復元模写研究では、意図的な背景色を塗らずに提示したが多くの意見を頂戴したい。

根津本《鶉図》は、足利将軍家に蔵され、所蔵者が代わるも500年以上もの間、我が国で大切に保存継承されてきた南宋画の名品の一つである。前述のようにその画面構成や描写の技術の高さが評され、現代では国宝に指定されている。そのため、多くの展覧会に出品されまた、幾つもの先行研究が報告されていることから、大勢がその存在や図様を認知していると考えられる。しかしながら、そのような作品であっても、未だに理解されていない部分があることをこの度の調査によって確かめられた。

描かれた当初の根津本《鶉図》では、枸杞の花弁と赤い実が画面上で華やかに装飾性をもたらしていた。現代の我々がよくみなれている作品でも、徐々に経年変化によって彩色や形の確認が難しくなっていることがあるのかもしれない。これらを念頭において改めて確認していく必要があるのではないだろうか。本研究が今後のさらなる研究の一助となることを願いたい。



〔図 7〕 根津本《鶉図》現状模写



〔図 6〕 根津本《鶉図》想定復元模写



〔図 8〕 根津本《鶉図》現状模写（左）と想定復元模写（右）